

地名の地理學的考察とその一例 (四)

小林 悟 一 郎

三次限

之れは二次の部で述べたものの中にも密接せるものがあるが、それは古人が三次と二次と混同し同一に思想し易い爲めである。その爲めに上下の如きも時により異つた様であるが、不幸にしてこのフイールドの地名に就いてはさう言ふものは得なかつた。却つて上下は地形に即してゐて、各個一點の聚落でなく郡・國といふ様な大きな政治的區劃が東を上とし西を下とするなどの一都の方・民族移動の方向・太陽との關係等は今問はないが―思想を表はしてゐるのみである。即ち地形を超越し得る場合、或は地形の上下判別困難なる場合の大區劃に對してのみ、地形に依らぬその土地、時代、又は氏族固有の思想に依つて、上下を使ひ別けた様である。

a、上

約百を數へた中「下」を伴ふものが三十九であつた。山地部の二十六の中「下」と對するものは四つである。平地では同じく六十一の中それが二十九あり、又その「中」を伴つて三分されてゐるものが五つ程あつた。之等は平地部の聚落が自在に發達したことを表明してゐるものと思ふ。勿論本原の村落に上とも下とも言はずして、基點とされたものは柵町(山)の如きものがある。その柵町は中と下とがあつて上に當る所は本柵町ともいふべきもので、單に柵町と言つてゐるのである。

「上」の讀み方に就いて特に著しいものを舉げると、杵島の上瀧はワダキといふ。ワはウハの約であること明白であるが、小城及筑紫に山神

がある。筑紫の場合は立派に大山祇を祀り上げてゐるが、兩者の地形の酷似から山上でないかと思はれる。恰度佐賀郡の川上が上を神にとりて水神豊玉姫を祀り、八幡云々の傳説により神功の妹を祀るなどと誤傳逆説して風土記などのあるに至れると同類である。川上の淀姫社に就いては尙述べたい事があるが本稿の眼目外になる。

b、下

これは七十二、それから前記「上」を伴ふもの三十九を去れば三十三残る。又その中でも二部落對稱の「下」でなく或る基標の下といふ意味のものは左の如きものである。

粟宕下(早)宮下(杵)＝瀬下(久留米)城下(山下)八(八)等

大體聚落の發生をよく表はしてゐる。この何々の下と呼ぶものの中に入るべきものに、モトがある。之は全く上下對稱の形でないわけである。參考の爲め列舉してみると左の如くである。

熊本・橋本(早)岩本・松本(糸)山本・瀧元(東)松本(小)熊本(佐)坂本(神)松本(三)＝橋下(杵)久本(小)松本(佐)宮本・安本(瀨)木元(山)山本・松本(井)松本・金本・富本(浮)

勿論之には必ずしも立體感を伴つたもののみとは言ひ難く、單にそのあたり、邊の意のものもあるが、その原義により同一の類に屬せしめていふと思ふ。それから二部落對稱といふ簡單なものばかりでなく、その地方に於いて下つ方、上つ方と廣く呼び分つ「上下」が地名に冠せられたのもある様である。下野(三)などは其であつて下原など言ふものにもそんなのが含まれてゐると思ふ。三潞には大下といふのが二つある。大野島村のは中下に對して更に下の意かと思ふが、木佐木村のは「下木佐木」と「下村」の間にある。或は大門下の事かとも疑はれるが、下の多い中に差をつける爲であらう。下をゲといふのが二つ、即ち三潞の下林と朝倉の下川である。三潞の繪下古賀の下は別に論ずるであら

5。

c、高低

「高」は三十七を數へた中、山地部に入れるものは九つである。平地部は割合から言つても多いのであるが、一般に平地部に於いてはこの小さい起伏に對しても敏感な様である。殊に洪水などに見舞はれる所は然りである。地形圖は勿論、實地に踏査しても餘程の注意を拂はぬと「高」の實感が起らぬものさへある。併し偶然かも知れぬが瀬高から三瀨郡蒲地村高島、同郡大川町高津を経て、佐賀郡西興賀村高太郎に引く線から下方の平野にはこの字を見ない。是起伏の殆んど絶無であるからであらう。

高もカウに當てたものには原字が川であらねばならぬものがある。高嶮・高良(井)高原(小)などである。後者は雷山の西懐、古生層中の谷頭にあつて、附近の聚落の最高限線と思はれる六百米のコントロールに近いので高いことは高いが、近くの谷頭にもよく神水川・川頭など川の

地名が多いし、カウバルといふ訓と合せ思ふとき、川原であらうと思ふので、この部に加算してゐない。田高田(糸)の高も川らしい。其他この部に入れて數へたのにも、高柳・高津・高野なども川邊にあるので、もとはカウに宛てたのではないかと疑ふことも出來やう。

この高の反對の「低」字はなかつた。平谷・窪などがそれに當るのもあらうが、兎に角直接「低」といふのはない。

併しこゝに階段地形を示すと思はれるものに戀之段(井)と檀(池)山といふのがある。前者は八丁島と味坂・十樂との間の低窪地(地形圖では二萬分一鳥栖圖幅に七・五米線がそれを示してゐる)を北に控へて、少し高い段丘状の地である。後者は如何はしい點もある、が廣漠たる平地の池であるから「檀」が木の名とは取り難い。ダニが谷かでないければ段であらうと思ふ。

d、中

これは二次三次共通である。單に間中の意に

用ひられるので、大體二次に入れたがいゝかも知れぬ。上下に挟まれた「中」といふのは上の項に記した如く明白なのは五個である。

總數百七ある中、山地部は三十二である。少いと云はねばならぬ。主なるものを挙げると中島が十四(平十三)中原九(平七)中野七(平のみ)其他中村・山中・野中等が多い。又この中には聚落間に於ける位置を示すばかりでなく、或種地形等の中の意あるものがある。中島の如きそれで、水中島の意が多いらしく、この地方にては上下の島はなかつた。それに中島だけが澤山あることはそれを信ずる論據とされやうと思ふ。山中・野中・原中・田中・畑中などがあるが中が下にあるのはこの種と見られる。

筑紫郡には那珂といふのがある。郷名などのナカは灘之と説かれて來てゐる。併しこの一部落名としての那珂は直ちに然りとなし難い。吉田氏が川中の中とされたのは當るであらう。尙ほ同郡には仲村・中寺などがある。後者はジが寺

であらうことは寺倉などに近いので可なりの程度に信ぜられるにしても、チュウが「中」の意か否か未だ斷じ得ないのである。

これで位置詞を終稱するが、人類が如何なる方法を以つてその位置を示さうとするのかといふことは大體之等に探られることと思ふ。前述の通り地名が位置性を帯びてゐる以上は、單に山といひ、野といふものにもその土地が山にあり、野にあるを示すと見ればそれも位置を標榜するが、そう言ふ環境の中に於いても同種環境の中にての位置を如何なる詞で表示するかが、この位置詞に依つて探るべきことで、その他のものには位置表示以上の何物かを有するであらうと考へるが爲めに、以下に於いては「位置」といふことを省略して行くことが多いと思ふ。

B 地形詞

今まで論じて來た位置詞に於いても自然殊に地形といふことが如何に地名に關涉を持つかが窺はれると思ふが、更に地形そのものが如何に

地名に織り込まれてゐるか、反言すれば地名に於いて地形が如何に強い立場を有するか、更に地形を古來如何に形容し如何なる名稱を以つて呼んだか、地形と人文生活が如何に密接でありそれが如何なる程度に、如何なる形式を以つて地名に表はれてゐるかを探りたいと思ふ。

前説した如く第一自然を靜・動に別けた爲め、水を地形から去つてゐる。それでこゝに述べるものは靜的地形即ち陸地そのものだけに限られるに至つたことを斷つて置く。

a、山

ヤは彌イであるといふ。數多重々などの意ありて木々の繁さをいへるものといふことである。彌生のヤ、彌猛心のヤである。マは場所を表はす。職人などの用ひる術語「ヤマ」も仕事の立込みを意味する。然らば漢字の「山」字が示すところの高所の意に限られず、樹木繁茂せる所、森や林とも混用され勝となる。

山は發達せる文化人類のよき居住地ではな

地名の地理學的考察とその一例

い。併しその人文に及ぼす障礙、その起伏が及ぼす軍事的價値、その高度による展望地たる利便、それ自身の有する容姿、超然、神然、靜寂等の精神的魅惑は、嘗つて原人の頃の住所たりし爲めの殆んど本能的魅力と共に、人類の物質的・精神的な生活には強く影響してゐる。谷と言ふ言葉は有しながら、而してその「谷」と呼ぶべき地形にありながら、その背後、又は兩側なる「山」を以つて各自の位置表示、聚落名としやうとするではないか。或は登山口なるが爲めに發達した部落、山に負ふ生業の聚落は無論山を以つて名としてゐる。寺といへば「山」といひ、社といへば「森」と呼びなしてゐるあたりにも、「ヤマ」に對する思想が窺はれる。由來山は靈場であり神祕郷であるとして來た。その信仰は地名にも見ることが出來様と思ふ。

本地域にはその「山」の附くものが百四あつたが、背振山地部に六十七あつて、残りは大抵平地部の邊縁なる杵島・耳繩・八女等の山麓であ

る。本當の平地部にあるものは左に擧ぐるもののみで十三である。

山嶺・山津(佐)白山・山浦・山ノ町(瀨)中山・村山(山)山ノ井・今山(八)山・今山(井)龜山(浮)粟山(朝)

佐賀郡の山津と山領とは近いのであるが、昔このあたりを山といつたのではないかと思ふ。そしてその山は森林の意のもので或は寺院などにも關係を有するかも知られぬと考へる。他は之に類するものの外に、極めて低い起伏を指したものである。三潞の山ノ町の如きも近くに糠尾(極めて低い尾であるが)などの地名もあり、地形圖に於ける十米コントロールが示す如く沖積期に成れる筑水の一段丘である。山門の村山は姓氏に關係してゐないかと思つてゐる。新沖積の地であるので開拓に關連ある姓氏と思はれるのである。それから陶器製造所乃至は土取場も山と言つてゐる。皿山(筑・早・三等)練瓦山(早)等でその山といふのは既に工場を指してゐる様である。同じく石灰・石炭類を始め鑛業場をも

亦山とよぶが、フィールドにはそれらしいものは見當てなかつた。

山の中で山門は古來定説がなくて、山門説・八女津説が主なる主唱であると思ふ。併し八女津であれば極めて古いもので矢部川の流路が異つてゐたにしても、又海岸が退却したにしても、いづれは瀬高其他現在の矢部川に負える地名より古いことだけは明であらねばならぬ。本來大和國のヤマトは民族東漸の折、故地九州の地名を彼地に用ひること多き爲め、筑後山門又は筑前山門(今は下山門といふ聚落名が残つてゐる)に關係あるもので、同時に研究すべきだと思ふ。この考へから言へば重要な資料だと思ふ。山門説即ち山の門に封じられた盆地故にと考へると大和國にのみは極めて適切と思はれるが、九州に於けるヤマトは共に等しく山麓を數町離れた開放されたる平地にあつて直ちに採り難い。この二つの地名の偶然と見える位置の類似は、今の場合等かの暗示と見ることは出來まい。

か。筑前早良のは十郎川といふ小川に臨んでゐるがこのあたりはラグーンをなして生、松原の砂洲に抱かれてゐたことは、海岸地形の進展上正しく推理出来るし、それは大いして古い時代のものでなかり相である。故にトが津の變化と考へられないでもない。この九州の兩者に共通する考へは、山津が適した様に思はれる。併し大和國に於いて例へ故地名を用ひるにしても地形の似た所に故地を憶ふて名づける場合が多いので、山下即ち Yamamoto—Yammato となつたのであるまいか。山は音便に於いて Yam とすることは、例として山葉(小)をヤンハと訓み、山伏をヤンブシといふ様なものがある。モトといふ語は「下」の部では説明を略したが、龍飛御天歌に下日底とあつて、底の韓音は Mit であるから、鮮語と關係あるもので古い事だと思ふ。そしてマモが約されてマとなると直接に言ふと不足な所があるかも知れないが、尋常な轉訛説から言へば初めの母音が略されて Yam-

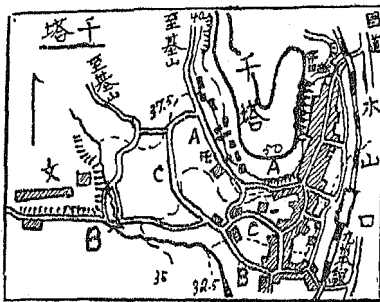
hoto となり、それからヤマトである。筆者はこの序に述べるが、第一回の母音の口形は次ぎに来る母音に影響を及ぼして第一母音に近からしめることが多い様である。乙がオト otu (ot or) — oto となり、走りぐらのクラ(比べ)がグロ sura—guro (n—oo とは近う)となる等である。之の例は多い。そこでヤマトとなり、ヤマトとならぬとも限らぬ。この考へはもしヤマトからヤマトとなる Yamoto—Yamato と考へる場合にしても便宜であると思ふ。

更に轉考して、今三養基に於いて山下川といふのが、山途川と風土記にあることと思合はされる。ヤマシタと訓んでゐるが、山下はヤマト即ち余のヤマモトといふものに當てられたものであるまいか。用途の途は音に當てたに過ぎずして根標とすべき用字でないと思ふのである。筑前、筑後の山門が現在の位置でも山下と言ひ得ると思ふが、兩者共現在山門といふ聚落が、ヤマトの地名の全部の位置を明示してゐるものと

斷言は出來なくて、前者に於いては殊に下山門のみが現在稱せられるのみで城原、以南の野方に至るまでの山麓地を舊稱したらしいのである。後者も本告あたりの山麓線から遠い所ではないので、僅かの聚落の平地進出を肯定すると一層「山下」といふことが適切になると思ふ。或は山手・山路などと關係を求めるときも試むべきかも知らぬが、兎に角ヤマトのヤマは山であると思ふ。八女津説は八女が山の意である場合の外今採らないのであつて、山の部に入れるのが終局の論旨に止めて置く。

山をセンと讀むことから轉じたと思はれるものに、千塔(三)仙道(早)がある。後者は字でなく、又塔の字に捕はれて説くべきものでなく、圖示するが如く木山口の古街道から小丘の一端を打抜いた道に依つて、山道乃至は山道山(千塔山)と言ふものと思はれる。第六圖に於けるB路は山道Aよりも新しいものである。道路の時代はABCの順と見てゐる。センタフと言はずにセンドウと里人の言ふのは千塔でなくて山道の音を傳へてゐるものと思ふ。仙道は脇山村で、油山城の西下にある。山麓聚落で、そこから山道が登る故であると思はれる。仙道の用字は中仙道などと同じく、千塔などより溫和な用字である。フィールドの千塔、仙道が共に基肆城・油山城を控えてゐることは興味ある遇事である。或は兩者共寺院墓地に結び付けて千塔千燈などと取らうとする人もあるが筆者は脇山の仙道の方が起原も新しい爲めその用字は可なり信賴することの出来る正直なものだと考へる。

第 六 圖



山の古語が残つてはゐないか。北九州のことであるから鮮語との關係を考へねばならぬ。鮮古語に於いてはマル(昔)モリ・モイ・每マイなどいふ言葉が山といふことになつてゐる。之等から來たと思はれるものに室・諸・牟禮などの字を見る。室・諸は尙ほ水の部で説述することにして、本項に略するが八女郡に牟禮が一つある。ムレは豊後あたりでは夙く多く、山名に見るので山の意であることは夙くより信じてゐる。このムレは又ムネにも通ずるらしく、八女郡の川に花宗川といふのがあるが、この宗はムレから來たものらしい。併し八女のムレ・ムネが果して山の意のものかどうかは尙ほ他項に論ぜねばならぬことがある。モリ・モイが單にモとなることも帶山城シトホモノヤシの如くであるので、地名の探究にも心すべき事であると思ふが、糸島の眞方のマなども疑へばそれと思はれぬこともない。

背振は山名から來て今は村名にあるが、振は山の意あるものだと信ずる。大振山、九千部クサキベ

振・部も同じであるが之等に就いては山名の部に譲る。

又山の事を昔タルと言つた例がある。神功紀に沈彌多禮シムタとある、多禮も「山」であるらしい。これも鮮語と關係あると思はれて、彼地の高山縣を百濟は一云難等良縣といふし、今の濟州島は耽聞の國であつた。この島は之全くの山である。フイールドには多聞山・長垂山など山名には見える。併しその他の地名・聚落名としてはあまり無い様である。樽門(東・井)足穗など如何かと思ふだけであるが、之も水の部にまた述べたい事がある。割合に山に對しての古語の涉獵には成功せず、山名以外に於けるそれは一層であつた。茲にも何等かの因由を求めたいと思つてゐる。山峯名に就いては別に述べたいので此處には略しておく。

b、峯

これは山ほど通俗でない。數に於いては九個しかなく、その中山地部に五個であるが、外に

八女の長峰(村名)は東部山地から通稱人形原に連つて甘木川と矢部川の間を劃する明瞭な丘陵に出でたるものと思ふので、山地部に入れて差支ないと思ふ。大體山地部に占められてゐることは當然の事である。特記することは糸島に片峰が二つあること、そしてそれが共に獨自の起原に依るもので小さいスパーなる峯狀の山尾の片側に依る。雷山村のは明らかに峯形の偏倚を示してゐる。

ミネと同じものにミネがある。早良の長峯は峯をミネと訓んでゐる。ミネには胸・棟・旨など當てられる事が多いが、フィールドには三井に宗崎といふのがあるだけである。之は旨等と共に嘉字を捨つたに過ぎない。胸の語原に就いては説も多い、併し胸と棟と峯に通ずる事はたしかだと思ふ。神代紀の胸副國の胸などの如くである。又前記牟禮とも考合せねばならぬ。ミネ、ラナ相通は今煩説するを要せぬ。ミネは嶺に發語ミを冠すると今まで稱せられてゐるが、

鮮語マル・モル・ムレの系統と關係ないと斷言はなし難い。勿論ミネのミが發語とするならば *no-mine* から轉じたとすべきで、然りとすれば畝ウネのウも發語とせねばならぬであらう。

語原は兎も角として現在では棟形の山、即ち領線のよく連續せるものにミネの語、峯の字は用ひられる事になつてゐる。勿論峯頭・尖峯など言ふ場合は別である。

c、タケ

ヤマは隆起せる地といふ觀念のみでないらしいことは先述したが、高く隆れるを示すだけの語に、まづタケがある。高であり、岳である。之を用ひる場合竹と紛れ易い。又好字「武」は兩者に當てられてゐるので、その原意を探ぐるに困ることがある。此の地域では岳に入るものでは、山名を除いては小城郡の雷山の南麓に岳といふ小部落がある。谷にあり今尙竹林もあることゝて、却つて竹かも知れないが、山間の地であるのでこの岳の字を用ひてゐるらしい。暫

く之を採つて置く。佐賀郡には高野岳といふのがある。権現山の北側の尾に跨つてゐるから、地形から見て妥當と思はれる。糸島には武があり、筑紫には成竹、早良には金武などが候補されるが、皆等しく斷じ難い。成竹には背後に成竹山があり、成竹は初めの山名でなかつたかと思はれるが、ナリに就いて意見があつて、水の部に述べるが、タケも之の部には入れぬことにする。金武は今は村名でもあるが、吉武等と共に同郡西側の山麓にあるものである。叶ヶ岳といふ山名に縁がないかと思はれても、斷定出来るまでは之も茲に屬せしめない。

以上は山地部であるが、平地部ではそれらしいものを見ない。併し小高い段丘状の土地に高とよび、タケに移り行くことは有り得ることであらねばならぬ。山地部のものも揆は一であるが、糸島の武の如き、もし之れが岳であるとすれば右の如き経過から來たものと思はれる。

d、ヲカ

之は左の如きものがある。

岡田・岡本・諸岡・永岡(筑)元岡(糸)岡口(東)富岡(杵)二岡(杵)吉岡(山)岡山・室岡(八)

皆山地部と雖もその奥地にはない。低丘をヲカと言ふ用法がよく表はれてゐる。低地部に於いても八女の岡山は小丘の名で、それが村名にもなつてゐる。室岡もそれに依るものと見える。低地部の他の二はその處に明白な起伏を感ずるのでない。吉岡の如きは僅かに高い土地が南にあるその高みに依るものと見ねばならぬ。之は吉の部で述べるが、吉の地名に起伏の甚だしいものが少いのは概則と言つていゝものである。岡崎はそう言ふ地形から遙かに野の沖に出てゐる。

このあまり高からぬ地を呼ぶ用法なるものに臺がある。筑紫の安德臺といふのはその好例で、河成の段丘を指してゐるのであるが、其他では太原などのダイは臺であつたのでないかと思ふ。前述した「段」も同じである。

e、ヲ

之は尾の字を用ひる爲め、ヲのすべてが動物の尾の形せる山脈、スパー即ち山尾を形容するものにのみ限られてゐるかの如く考へることが多い。大部分はそれであるが、もう一つの原因があると思つてゐる。即ち古事記などに上枝ホツユ・下枝とある。中卷應神の段の御歌に「わが行く道の香ぐはし花橋は上枝は鳥居枯らし下枝は人取り枯らし」とある。この上の意のホは穂に通ずると思ふ。即ち秀づる―ホ出づるのホである。ホに就いては尙論すべき事もあるが、穂と尾と通ずることは今までも説かれてゐる。この意味のヲは「高さ」を示すものと思ふ。ヲカが尾處であると言ふ、その尾はこの高みあるホーヲである。峯にヲといつてゐることも之から解釋す可きだと思ふのである。

それで本地域にどんなものがあるか、まづその數は三十九ある。山地部十七、平地部二十一、平均より山地部に多いが、平地にも上述の諸地

形詞よりも分布してゐる。二個以上あるものを試みに舉げると、平尾が五、中尾が三、長尾が二で、植物が九その中松尾が三ある。動物が四といふわけになつてゐる。

佐賀郡では「蕨尾」をよんでヲランボといふ。之は蕨の點に疑のない所であるし、このボは用字通り―ビヲの約と信ずる。面白い訛りの一つであらう。同郡では「大尾」をイニヲといふ。

この部の中には三井の足穂なども入れてゐる上述の如く穂と尾と同意といふ考へからである。即ち足穂は足尾であると思ふのである。又前に述べた筑紫の御迎の御も尾に取つた。御は發語の小・ヲかも知れぬが、安徳臺と向ひ合ふ所、尾向の方が一層地形にもふさはしいからである。

尙八女に一應といふのがある、之も尾と取りたい。オウとヲの轉移はその例も多い。故に一應は一ノ尾の意であると思ふ。そこには荒木川（筑水の支流）の上流なる水側に東の方から延んで來た山尾がある。但し聚落は山尾の對岸にあ

る。

其他「王」といふのを尾の代りに當てたものがある様である。牛王・龜王・石王・王丸などである。以上の中この項の初めに述べた穗高所を表はすものはどんなのがあつたかといふと、上記足穂の外に入女の尾島などは之れでないかと思ふ。又今の處、神名であるが、古昔基、城山に祀られたと言ふ荒穂宮の穂も之で、荒穂は荒峯であると思ふのである。即ち基山の一名であつたらうと考へる。

この尾の地名は山地丘阜の縁邊にあること多きは、動物の尾に比考することが一般であることを物語るものではあらう。又その山尾の横側にあるものと、尖端にあるものとを別つことも聚落研究に對して興あることではあると思ふ。

f、サキ

之は地形界線に於ける陽側尖端である。即ち高い方の突出部である。この場合の反對は後でない、隅・隈・窪などがその反である。即ち其等は

低い方の進出部である。人は高い方、開放されたものを陽即ち基準とする。それでサキは出といひ、その反は入と通稱する。サキは結局突出部である。字は先が本來の意味であらうが、前も同じである。併し古來この地形に對しては崎といふ字が用ひならされてゐる。崎・崎はこの爲めの地形文字と見做す。岬を用ひるミサキは同種である。併しミサキのミは發語とされてゐるが、之は海のミ、水のミであると考へる。即ちミサキは水陸兩域間の界線にのみ限られるのが本當であると思ふ。

先づ海水に臨めるもので、聚落名でない崎角名を擧げると左の如く十八ある。

^{ヤラ}也良崎・濱崎・妙見崎(早)牛頸崎・津船崎・津上崎・唐泊崎・西浦岬・三瀬岬・大門崎・佛崎・野邊崎・鷲首・立石崎・大崎・配崎・磯崎・串崎(糸)

右は玄海側ばかりでその中でも福岡縣側である。フィールド内の肥前側は大部分松浦潟のサンドビーチで崎角はない。また有明海は人工を

加へる場合の外は遠淺の泥海であり、崎角名を呼ぶべき所がない。例へ人工干拓をなしたる區域の隅角などもあまり崎名を聞かなかつた。又右の中ミサキは二つで、外は大抵崎で片付けてゐる。以上の崎角名は茲にすべてを説き纏めて以下關説外としたい。

也良崎は古い名であることは萬葉などにも筑前守山上憶良に歌はれてゐて、その歌により崎守がゐたらしいことは地名辭書にもある。このヤラに就いてはもつと研究してみたいので茲には許してもらひたい。妙見崎はさほど古い名ではないらしい。原義は字義通りである。ツネ崎は津之上崎の約である。三瀬の訓みも簡單なものではあるが、余の持説を裏書してくれてゐる轉訛である。即ちミツのツがゼのe韻に誘はれてツイとi韻に引かれてゐる。ツを促符に用いた爲めにそのu韻が弱められたからである。大門崎はその海に臨める玄武洞てふ自然を背景として祀り上げられた神社から、逆に賜はつ

た名前と思はねばならぬ。くしふる神の御舎の大門としてはあまりにふさはしい神祕の門であつたらう。佛崎は玄海に洗はれた海崖に現はれた岩角の形容らしい。大門崎と好一對であると思ふ。野邊崎は佛崎に比べて細長いので延べ崎かと考へてゐる。このノベと、野邊崎と佛崎の間の沖にあるノフ瀬とは關係ある事と思ふ。鷲首は牛頸崎と共にその形を擬したもので地形から見て興味あるべき事である。配崎のクバはクマと通ずると思はれる。手前に大入といふ地名がある様に、隈を抱ける陸繋島の前端である。串崎のクシに就いては後に述べたい事もあるが、陸繋島であつて、紀州の串本、丹後の久志と同じく串の字義で結構であると思ふ。

以上の海洋に臨む崎角名の外は、水に臨むと否とを分つこと、その本源に遡つてその分類をしやうとする時は、三様になる。一は全然水に關係ないものと、二は以前に水に臨んでゐたが現在はさうでないもの、三は現在水に臨めるも

のである。併し價值から言へば二は三と同項にせねばならぬが、今は之を試みない。

聚落名には五十五あつて、背振部に二十五ある。平地部の三十の中、杵島の二、八女の三、三井の二を山麓なる爲めに除けば二十三となる。以上から見ると水に臨まなくても崎と呼ぶことのあることは明白である。即ちハナ一端と同様に用ひられてゐるので、崎といふものの定義に水を條件の中に入れるのは今更愚である。

サキには「幸」字を用ひたらしいのがある。即ち一つの好字である。三養基郡に幸津とあるが今はサイツと言つてゐる。古生層からなる朝日山の南斜面の崎にあるが、今聚落のある所は花崗岩を基盤とする洪積地で、直下に筑水の氾濫原が迫る。崎津であつたのにサキに幸を當てたものと思ふ。幸にサキ・サイ兩訓がある爲めでもあらうが、或は幸を當てる時既にサキをサイと訛つてゐたとも見られる。キ↓イの轉訛は自然である。喉内音は韻にのみ響く様に轉じて

行くことが極めて多い。k乃至はchの省減である。風土記に見える狭山郷のサヤマも幸津のサイに關係あると思ふ。崎山がサイヤマとなり、Savvama となつたと思ふ。今も幸津の尾崎に當つて岨ある森をチャイヤマと言つてゐるのはサヤマ(狭山)の原音サイヤマの轉を傳へてゐるものと考へられる。サヤマに就いて風土記の説く景行帝云々の説はサヤマの音に拘泥して逆説したもので、又サヤマを旭山といふ現時の山名や、精川シラダといふ河名と結び付けん爲めに苦しむのは、吉田氏を始め愚であると思ふ。

尙崎のサキがサイになつたのは外にもある。同郡基山村にオノ上ウヘといふのがある。これは同村の園部と宮浦との二つの谷を別つ一山尾の上にある小部落であるが、山形から見て崎、上と斷ずるのである。磐イハ、上などと思ふべきでなく、又方俗シャアノへと言ふ位であるから道祖ミチノコ、上かとも思はれるが、今の處道祖との關係は認められないし、上記チャイヤマの轉訛と似通つても

ゐるのである。以上二つは崎の中に加算してゐる。

尙外に幸^チ元(東)道祖^サ元(小)道才(井)など、この部でないかと思ふが明斷出來るまで除外して置く。併し地形はこの部を疑ふに極めて好適

である。

幸、才の外「咲」なども用ひられる場合がある。又三瀨の木佐木、杵島の喜佐木は論ずべき事もあるが、加算してゐることだけにして他項に譲る。(未完)

西班牙紀行 (三)

小牧實繁

六月一日、土曜日。大分疲れたらしい、眼を覺ますと十時十五分前である。今夜出發の準備をして置いて十時半朝食、市内を見物する。主として名高い御寺の建築などを見て廻つたのであるが、中食もホテルに歸らず市内の一料亭で済ませると云ふ勤勉振りである。

伽藍の塔に昇つて見る。そこに展開したものはそれは素晴らしい景色である。二〇三階の階段を喘ぎ上つた甲斐はあつた。市街は一眸の中

に收まり郊外の擴がりまでも手にとる様である。地中海の美しいこと。大空と同じ紺青!流石に南の海ではある。

六月の聲を聞いた精ではなく本當に暑い。一寸身體がだれる位に暑い。その暑い中を見物して行く。御寺の中へ這入ると急に涼しくて氣持よくなる。これ丈けでも多くの市内の御寺の存在の理由はある。強い日光を避けるためには家々でも色々の工夫をこらして居る。然し我々の